

批判的合理主義と伝統的自然法論

——カール・ポパーとヨハネス・メスナーに寄せて——（一）

山田 秀

目次

前書き

第一章 アイヒシュテット・カトリック大学名誉博士号授与を巡って

第二章 ソクラテス学徒としてのポパー

第三章 ポパーの記念講演（以上本号）

第四章 十周年記念シンポジウム

第五章 ポパーとメスナー

結論

前書き

一 カール・ポパーは、世界的に名声を博した科学哲学者であり、同時に、自由主義社会哲学の擁護者としても知られている。⁽¹⁾ 我が国では、哲学者市井三郎⁽²⁾、法哲学者碧海純一、経済学者安井琢磨らによつて導入された。とりわけ社会科学の分野では碧海教授の貢献が著しい。私も大学入学直後から大原長和教授の講義（昭和四九年度前期講科目法律学）を機縁にして、碧海法哲学に親しみ⁽³⁾、それを通じてポパーの名を知るに至り、その翻訳書、そして英文著作を苦勞しながら少しずつ読んだ経験がある。

その後、法哲学者水波朗の下で伝統的自然法論（特にヴィーンの社会的現実主義に属するヨハネス・メスナー）を学ぶことになり、長いことポパーから離れていたが、二〇〇七年の第八回ヨハネス・メスナー国際シンポジウムで⁽⁴⁾ ドルフ・ヴァイラー教授（ヴィーン大学倫理学及び社会科学研究所長メスナーの後継者）からポパーとメスナーについての話を伺う機会があり、その時に教示された文献を後日取り寄せて通読してみたところ、極めて興味深い事実に触れることができたように思われた。そこで、ポパーについての私の研究はゼロに近いと言わねばならないが、我が国では、ポパー及びその系譜に連なるエルンスト・トーピッチュやハンス・アルバートの批判的合理主義を反自然法論の図式の下に理解することが一般であると思われるので、果たして、ポパー自身が反自然法論者であったのか、という問いを提出してみたいと考えた次第である。

以下の論述は、それ故、固より試論に過ぎないが、ポパー思想のより十全な理解に幾分でも資するとすれば、こ

れにすぐる幸いはない。同時に拙稿は又、伝統的自然法論ないし哲学的カトリック社会倫理学⁵⁾への興味⁶⁾の喚起をも狙っている。こうした問題に説き及ぶ最初の切っ掛けは、南ドイツの或るカトリック大学による名誉博士号授与に遡る。これを記念して同大学で二〇〇一年に十周年記念シンポジウムが開催された。その中でポパー思想が様々な関心に基づき様々な側面から論じられた。その報告書が二〇〇二年に出版されているのだが、これに非常に興味深い記事が見出される。そこで、名誉博士号授与に関連することから説き始めることにしよう。

第一章 アイヒシュテット・カトリック大学名誉博士号授与を巡って

二 カール・ポパーは、一九九一年五月二七日に、アイヒシュテット・カトリック大学歴史学及び社会科学部から名誉博士号を授与された。その模様は、『アイヒシュテット叢書（哲学・神学部門六）第一四巻』として出版されている。書名は『カール・R・ポパー「歴史解釈における冷笑主義に抗して」、フーベルト・キーゼヴェター「カール・ポパーソクラテス学徒』とあり、一九九二年にフリードリヒ・プステット・レーゲンズブルク書店から出版されている⁶⁾。本書の中身は、ポパーの履歴並びに叙勲受賞、アイヒシュテット大学歴史学及び社会科学部長ハンズ・W・マウルの短い祝辞、アイヒシュテット大学長ニコラウス・ロブコヴィッツの短い祝辞、フーベルト・キーゼヴェターの祝辞（Laudatio）「カール・ポパーソクラテス学徒」、カール・R・ポパーの記念講演「歴史解釈における冷笑主義に抗して」となっている⁷⁾。

三 さて、我が国でこうした式典が開催される時にみられる一般的な慣例を思い浮かべるならば、最初に大学長の

祝辞が述べられることであろう。しかし、アイヒシュテット大学⁽⁸⁾では学部長が先に祝辞を述べている。その理由は、ロプコヴィッツ学長の祝辞に述べられている。興味深いので先ず紹介しておこう。

ご来場の皆さん、サー・カール、ドイツ語圏大学の長い慣行に従い、学長ないし大学総長が名誉号授与に当たって出る幕などありません。博士号、そして又名誉博士号は大学からではなく、学部から授与されるものです。この点で、学部は法律の規定の枠内で完全に自律的であります。⁽⁹⁾

次に、マウル学部長による祝辞を少し見ておこう。学部設立から十年ばかりしか経過していない大学で開設した名誉博士号制度の第一回授与者として、サー・カール・ポパーを選定したことが紹介される。授与される側がポパーであるのだから、祝典が彼のために催されるのは固より言うまでもないことであるが、それと裏腹に、実は、世界的に有名なポパーが、その高齢（八八歳）をも厭わずに、名もない大学に赴いたのだから、これこそ何よりもアイヒシュテット大学自身にとつての荣誉である。

四 ポパーが最初の名誉博士号授与候補者であることを聞かされた学長の第一声は、「これ以上望みようもないことだ。」だったそうである。学部長は推薦理由として二つの事項を考えていた。第一は、戦後の西洋民主主義に及ぼした極めて重要な影響である。殊にドイツ連邦共和国にとつてそうであり、ヴィリー・ブランド、ヘルムート・シュミットだけでなく、当時の現職首相であったヘルムート・コールも影響を受けていたのだという。コール首相は、特別に祝辞を書面で準備しており、祝典の折に手渡してもらうよう要請したほどである。第二の主題ないし理由は以下の通りである。

それは祝辞中の「あなたは常に真理を求めて、誠心誠意、批判的理性を以て精進されました。」という言葉に認められる。実はこうした態度は、何も批判的合理主義の専売特許ではない。この態度こそが、ポパーとアイヒシュ

テット大学を繋ぐ紐帯である。別言すれば、ポパーと熱心なカトリック教徒とを結びつけるのは、真理を求める真摯な態度であり、これこそが対話の前提である。ここで、宗教的対話という文脈においてなされた或るトミストの恐らく適切な発言を引用しておこう。¹⁰⁾

「対話」は本来、相手の語ることに真理はないかと耳を傾けるところにその本質のあるもので、自分の意見と同じ意見を持つようにと相手に語るのであれば、それはプロバガンダであって「対話」ではない、とノーベル平和賞受賞者、ドミニコ会神父ドミニク・ピール師は言う。

宗教的「対話」の本質は、相手の立言の宗教的眞理性を尋ね合うことにある。そして自他の発言を眞に宗教的なものとさせもし、諸宗教の相互理解の共通項を与えもするのは、全人類の宗教的本性であり、その本性法則としての宗教的自然法である。しかもそれは、対話する双方を含め万人に暗々に常に知られている。

五 再びロブコヴィツツ学長の祝辞を参照してみよう。すると案の定、根源的可謬主義を奉ずるポパーへの授与の話に眉を顰める者もいたのだという。しかし、と学長は述べる、ポパーは一九三四年刊行の『探求の論理』において既に実証主義に無効宣言を言い渡していたのであると。

ポパーの業績の詳細な評価については、少なくとも授与との関連でのそれについては、これをキーゼヴェター教授に委ねるとして、一つの事項について話しておきたいと学長は言った。

正しいと自分が考える人々だけを尊敬崇拜するのは間違っているばかりでなく、知性ある人にも相応しいことではない。特に哲学者につきこれを尊敬するのは、意見が合致するからなどという理由からではなく、反省し、しかも高い水準で、決定的質的基準を考慮してこれを行うことが出来るよう我々のために地均しをするからである。¹¹⁾

これはドミニコ会師ボヘンスキー J. M. Boehenski の教示に由来するとも言う。要は、最も重要な哲学上の論

敵を愛し、その思想に通曉した上でこれと批判的に取り組むべしという教えである。¹²⁾ その意味でも、この名誉博士号授与対象者としてポパーは最もそれに相応しいという訳である。聖パウロの言葉に、「総てを吟味し、善きものを保ちなさい。」とあるが、これは学問の世界にも通用する。

次章において、キーゼヴェターによるポパー評を紹介していこう。

第二章 ソクラテス学徒としてのポパー

六 キーゼヴェターはポパー自身の発言を以てその賞賛を開始する。「すべての生き物がよりよい世界を求めている。」この命題は、論理的には言うまでもなく、全称肯定命題であるが、同時にポパー自身の個人的な関心事項であり人生訓でもある。言い換えると、事実の確認命題であるばかりでなく、倫理的規範命題でもある。更に、「必要は発明の母」を追加しよう。何よりも、世界中に広まった悲観主義にも拘らず、豊かな社会においては我々の世界を常に改善していく可能性があり、一步一步ないし問題毎にそうすることが我々の責務であり、なし得ることであるのだから。こうした根本的精神態度が彼の出自と時代背景と密接な関係があるのは、言うまでもない。

七 ポパーの社会哲学は、二〇世紀における二つの革命と緊密に結びついている。一つはアインシュタインの相対性理論と原子爆弾、他の一つはマルクス主義ないしファシズム及びナチズムである。そして、ポパーは科学部門では『探求の論理』によって、社会哲学部門では『歴史主義の貧困』と『開いた社会とその敵』によって、革命をもたらした。これをキーゼヴェターは「二重革命」と命名する。そこに見られるポパーの根底にある三つの原理とし

て、真理、人間の可謬性、批判的理性が挙げられる。¹³ 第一に、ポパー哲学の嚴の如く嚴存する揺るぎない基礎、それは真理探究の態度、真理への愛、これと結びついた最大限の明晰性と知的誠実である。ここから理論を批判吟味して行くための「統制原理」として真理を把握する見解が帰結する。科学ないし学問 Wissenschaft において存するのは、ただ真理を把握しようとする試みとして投ぜられる言わば漁師の網としての「仮説」でしかない。それと関連して第二に、ポパーは自らを「多元主義者」と規定する。絶対的な基準としての真理が学問において見られな
 いとするならば、しかしそれをどこまでも求めることこそが学問的な態度であるとするならば、多元主義的な見方は必定である。学問領域においてばかりでなく、もちろん実践領域においてもそれは変わらない。尤も、多元性のみの強調に終始しては相対主義に陥らざるを得まい。そこで第三に、上述したことと深く関連して、批判と合理性とは切り離せないということである。反証可能性の理論及びその経験内容の充実度の考えがここには窺われる。批判と自己批判は、科学（学問）であれ政治（実践生活）であれ、より高い合理性に到達するための前提条件である。

八 ポパーの場合、他の誰にも増して若い頃からの問題関心が後年まで持続しており、それが彼の基本思想を豊かに発展させていく土壌になったと考えられる。それ故、ここでその問題に言及しておきたい。

カール・ポパーは、プロテスタントに改宗したユダヤ系両親の三男として、一九〇二年七月二十八日に（當時はウィーン郊外の）オーパー・サンクト・ファイト Ober St. Veit に生まれた。大戦の結果オーストリアハンガリー二重帝国が崩壊し、カールは一六歳で高校中退。後にアピトゥルを取得し、数学と物理学の教職のための学業を修められたものの、定職が当時のこと故なかなかなかったが、一九二八年に『思考心理学の方法論問題に就いて』（未公刊）で博士号を得た。その後ファイゲルと巡り会うこととなった。その当時ポパーは『認識論の二つの根本問題』を書いており、その簡約版が『探求の論理』として一九三四年に出版されている。キーゼヴェターによると、一九九一

年五月二八日にポパー自身から直接聞いた話として、本書が『ヴィーン学団』の『科学的世界観叢書』の第八巻として出版されたものだから、本書が実証主義に算入されたのであったのだらうと考えていたそうである。¹⁴

九一九一九年六月一五日ヴィーンで拘留されている共産主義者の釈放を求める示威運動が発生した時のことである。¹⁵ポパーは三ヶ月ほど「共産主義者」ないし「前衛主義者」気取りであったらしいが、無防備の共産主義者や社会主義者の若い労働者が警察により射殺される事件を目の当たりにし、二重の意味で愕然とした。とくに、彼自身が加担していたマルクス主義に由来する犠牲者に対して、責任を払拭することは到底出来ないとわくわくであった。いわゆる「科学的社会主義」は、目的達成のためには、人々の生命の犠牲をも要求しさえするが、これは到底ポパーの受容できることではなかった。

マルクス主義との遭遇は、私の知的発展における主要な出来事の一つであった。それは、忘れられぬ数々の教訓を私に与えた。ソクラテスの言った「私は自分が知っていないことを知っている」という知恵を私は得た。それは私を可謬論者にさせ、知的謙虚さの大切さを私の心に深く刻み込んだ。またそれは、独断的思考と批判的思考との相違を、きわめてはっきり私に気づかせた。¹⁶

かくして、教条主義、狂信主義、国家権力などが苛烈に激突することからポパーが引き出したのは、「科学的態度は同時に批判的態度でなければならず、科学も政治学も反駁 *Widerlegungen* を通じてのみ前進する」ということ¹⁷であった。これは二〇世紀の東側諸国の歴史的展開を顧みるとき、心深く首肯される。

一〇 かくして、ポパーは、自由主義的経験論者、或いは寧ろ懐疑的経験論者として、又カントの崇拜者として今日に至っている。キーゼヴェターによれば、一九世紀ドイツの経済学者でポパーの見解を先取りしていた者がいた。一八四八年にブルーノ・ヒルデブランドは次のように書いている。

人類の文明はすべて、個性によって生まれている。これら個性は、精神的成果の〔生み出される〕秘密の作業場であり、その河川が

人類の文化の潮流をなしている。それら無くしては、個々人にとっても人類全体にとっても、発展も文化も有しない意識を欠いた種の生命があるだけである。経済全体〔社会主義・キーゼヴェターの注記〕は、しかし、個性を抹殺し、すべての個人の利益に（「ママ」）生け贄を捧げ、こうして全人類の文明創出力を破壊し、結局、すべての文化と社会自体をも破壊してしまう。¹⁸

ここに、ポパーの学説、即ち、「試行、錯誤、修正」Versuch, Irrtum und Revision が明瞭に見て取られる。しかし、ポパーは、新しく「批判的合理主義」der kritische Rationalismus をこれに附加した。

一 ポパーは、プロテスタントの洗礼を受けてはいたものの、ユダヤ系でもあり、これが生命にかかわる問題になりつつあったが、幸い、ニュージーランドに移住することができた。それも、ヒトラーがオーストリアを併合する一年前であったこと、大戦中に一六名の親戚がナチスのために直接或いは間接に生命を落としたことを、名誉博士号授与前に、宿泊所から大学講堂への道中、ポパーはキーゼヴェターに語った。¹⁹ いよいよポパーが社会哲学に着手する秋が到来した。その関心は、ポパーにより historicism, Historicism と命名される歴史法則信仰²⁰、これは全体主義権力者が楯にとって自己正当化を図る常套法則であり、哲学的並びに政治的決定論でもあるが、この立場を反駁することに置かれ、その強い動機に支えられて『歴史主義の貧困』、『開いた社会とその敵』が執筆されたのであった。

前者は、最初『エコノミカ』誌に一九四四—一九四五年に連載され、後に単行本として一九五七年に英語版、一九六五年に独語版が出版されているが、これは彼の認識論を政治的実践（領域）に応用したものである。何れも、ポパー自身が被った経験に深く関連して書かれたものであった。

一二 ポパーは、自然主義的な主張を批判する章において、社会科学を心理学に基礎づけようとする試みの不可能なことを述べている。

社会学的諸考察を人間性に関する外見上強固な心理学的基礎へ還元する代りに、われわれは次のようにいっていいであろう。すなわち人間の要因は、社会生活とすべての社会的諸制度における、究極的に不確かな特有の気まぐれの要素なのだ。⁽²¹⁾

人間の社会的建設は政治制度に、そして制度変革の可能性に強く依存しているが故に、その制度は思想の自由を保障しなければならない。⁽²²⁾ 即ち、自由社会の基本的な肯定がここに見られる。これに反する社会は、不自由と抑圧に帰着するのである。ポパーは、それ故、歴史必然性を語るあらゆる形態の神話や思想を拒絶する。

『歴史主義の貧困』は、かくして、一方では全体主義イデオロギーに対する闘争の書となり、他方では「自然的必然性」を発見したと豪語して社会学的ないし歴史的考察方法を一般的発展法則に還元する見解を反駁するものもある。⁽²³⁾

一三 歴史主義は事実上「全体主義」(Holismus, holism)⁽²⁴⁾に帰着するとしたものだが、この全体主義に対してポパーは、その独特の「漸次的社会工学」(Stückwerk-Sozialtechnik, piecemeal social engineering)で応ずる。それは、「ぐじくり回し」(herumbasteln)、「お茶を濁す」(fortwursteln)類のものである。⁽²⁵⁾しかし、これこそが、民主主義社会において失敗を通じて進歩するという唯一可能で実行可能な行為モデルであり認識モデルである。失敗から我々は学ぶのである。ソ連東欧の東側社会における二〇世紀の社会主義の実験が示しているように、その全体主義的経済体制は経済的に高い生産性を誇るどころか、その逆であった。それに止まらず、人々の自由を大幅に奪い人々を抑圧し、財政的にも人的にも多大の犠牲を払った。ポパーは、夙に次のように書いている。

全体論的計画者は、次のような事実を見おとしている。つまり権力を集中することは容易だが、多くの個人の心に分散されているような知識、そして中央集権化された権力を賢明に行使するためには集中化が必要になるような知識のすべてを、集中させることが不可能だという事実である。⁽²⁶⁾

キーゼヴェターは、ここで東独の或る会社の記念号に掲載された文言を紹介した後で、ポパーは反ドグマ的な自由主義的樂觀主義の立場から、社会的実践としての政治に「恒常的な改革への体勢」を期待していると述べている。²⁷

一四 ポパーの大作『開いた社会とその敵』に説き及ぼう。歴史上の事件の成り行きの予告をなし得るような歴史法則を発見したと自称する諸種の社会哲学を歴史主義 historicism とポパーは殊更に呼び、これを体系的に分析することを『歴史主義の貧困』の課題とした。歴史主義の展開を例証する資料を集めて註解を施すのが本書『開いた社会とその敵』である。

この著書がしようとすることは、こうした予言者ふうの知恵は有害であること、歴史の形而上学というものは社会改革の諸問題への科学の細切れの方法を適用する邪魔になること、を示すことである。そしてさらに、われわれが歴史の予言者であることを止めたときわれわれが自分の運命を作る者になるでもあろうことを示すことである。²⁸

西洋において歴史主義への傾向は常に存在し強力な影響力を有していた。カントはそれを断ち切ろうとしたが、ドイツ観念論がこれを後退せしめる。それ故、ポパーはカントを「最後の偉大な先駆者」と呼ぶ。²⁹ キーゼヴェターは、ポパーが開いた社会の敵との総決算をするための出発点ないし原点としたのはカントの道徳法則、即ち、我々は責任を負う人間であるが故に我々の悟性を使う勇氣を持つべきであるという法則である、と言う。³⁰

一五 世界を、生活環境をなるべく改善していくことが我々の責任に属するのであってみれば、それは開いた政治体制において、或いはそうした体制においてのみ可能であるというのがポパーの信念である。プラトンの正義思想の根底には「自然によって支配者たる者が支配すべきで、自然によって奴隷である者は服すべきである」という理念があるが、これに對置して、ポパーは、「悪い支配者や無能な支配者があまりにも甚大な損害を惹き起こさないように政治制度を組織化するには、我々はどうすることができ得るであろうか？」との問いを提案する。³¹

かくして、主著『開いた社会とその敵』におけるポパーの中心思想は、社会療法の啓示に頼む幸運を開放性と政治および社会における自己批判的な態度で置き換えるということにあったことが解る。

一六しかし、このことは「人民支配」という形態の民主主義を肯ずる立場とは一線を劃する。即ち、民主主義的な開いた社会の政治制度は「人民」の支配ではない。民主主義の神髄は、人民支配原理にも多数支配原理にもない。これら原理は、歴史に見られるとおり、民主主義を葬りもするのである。ポパーの理解する民主主義は、民主主義的制度を除去ないし廃止しようとする動きを困難にし、妨げようとする試みである。⁽³²⁾ 民主主義の制度的な防御策で、詰り、選挙民の多数の支持を失った政治家は議席を失うという制御が働く限りにおいては、ポパーによれば、「悪い民主政治を平和な方法で改良すべく骨折ることの方が、無限の幸福と福祉を約束する専制政治に服するよりもよい」⁽³³⁾。同様の思考様式は、寛容についても適用されている。

一九八四年刊行の書名は『よりよい世界を求めて』となっている。それは、単に「よりよい理論」ではなく、「よりよい世界」、詰り、「より正義にかなった、より平和な社会」である。本書の冒頭と本文中にソクラテスの言葉が引用されているのが印象深い。

「不正を行うよりも不正を恐ぶほうがよい。」

ここにポパーの根本態度と根本経験が反映しているとキーゼヴェーターは言う。それは原始キリスト教の態度である。かくして、ポパーの批判的合理主義は、単なる科学論や方法論であるばかりでなく、政治的綱領でもある。

以上において我々は、キーゼヴェーターの祝辞に即して、ポパーの業績の特徴を眺めてきた。次章において碩学ポパー自身の声に耳を傾けると共にしよう。

第三章 ポパーの記念講演

一七 ポパーは、謝辞に続き、自分の講演で祝賀会参列者が退屈されないよう真面目な講演を試みる義務感に基づきお話をしなすと宣言している。論題は「歴史解釈における冷笑主義に抗して」とある。半頁ほどの枕詞はここでは省くことにしよう。

冷笑主義 Zynismus の歴史観は、歴史を動かすのは「欲」die Gier であると言う。即ち、所有欲、金銭欲、金、石油、権力など。専制主義だろうが民主主義だろうが事情はそんなに変わりはない。民主主義では偽善がもつと悪いとは言え。これが、ポパーが最初に説明する冷笑主義の主張内容である。しかし、と彼はいう、この見解は間違っているばかりでなく、無責任でもあると。「何となれば、我々が我々と歴史についてどのように考えるかは我々にとつての重大事であるから。それは我々の決断にとつても、我々の行為にとつても重大事であるから。」³⁴

一八 ポパーが論じようとする歴史観の三大流派の三番目のものが冷笑主義の歴史観である。これは、ナポレオン戦争とヒトラー帝国崩壊の間の期間根を下ろしていた国家主義ないし人種主義的な歴史観の後に大きな流行思想となった。それもマルクス主義の直接の後裔としてである。冷笑主義の歴史観はヒトラー登場にも実は関わっている。冷笑主義の歴史観が漂う、そうした雰囲気³⁵が社会に充満していなかったならばヒトラーは登場しえなかったという意味において。この歴史観にナポレオンとヘーゲルが一部絡むことによって、歴史が国民（民族）ないし人種（種族）の雌雄を決する闘争と理解される。その歴史観に忠実であるならば、ヒトラー帝国の崩壊はドイツ民族の絶滅を意

味する筈であつた。尤も、これは幸いなことに起こらなかつた。

予言が外れると、真面目に受け取られるべき理論は信用を失墜するものである。国家主義的な歴史観はかくして失墜した。その後のし上がつてきたのがマルクス主義の歴史観である。又、ポパー自身が格闘した思想がマルクス主義であつたから、特にこれは言及に値する。

一九 マルクス主義の歴史観は、「唯物論的歴史観（唯物史観）」とも「史的唯物論」とも呼ばれている。これはヘーゲルの歴史哲学を改竄したもの（解釈し直したもの）である。歴史は、もはや人種の闘争の歴史とは見られず、階級闘争のそれと看做される。唯物史観は、社会主義ないし共産主義が歴史的必然性をもつて勝たねばならないという科学的証明を提供するという。ポパーはここで『哲学の貧困』を引用しているが、我々はこれを省略しよう。要するに、ここでは「科学的な必然性」を以て社会主義が到来しなければならぬことが証明されるとされる。マルクスは生産者階級が分裂することなどないだろうと考えたのではないか、とポパーは推測する。⁽³⁵⁾

二〇 ポパーは、自らが一六歳半ばに経験したことを思い起しながら、社会主義の非人間的な現実を描写していく。多少長くなるが、明晰に語られている上に、ドイツ語文献に直接接する機会が薄からう読者の便宜を考慮して、以下該当箇所を引用しよう。

若者が社会主義（到来）の歴史的必然性の証明の餌食になりそれを信じてしまうと、役立つ行為をともにしなくちゃならないという深い道徳的責務を感じるようになる。それどころか、私も見たが、共産主義者がしばしば嘘をつき道徳的に非難されるべき手段を講じるのを目の当たりにした場合であつても、そうである。何となれば、社会主義は到来しなければならぬ以上、社会主義の到来に邪魔立てするのは明らかに犯罪的であるからである。然り、社会主義到来を促進すること、そのために何でもすること、なるべく抵抗を低減すること、こうしたことは各人の義務でさえある。もとよりこうしたことは個人（の力）でなし得るものではないから、運

動とともに、政党とともに行動し、忠実にこれを支持しなくてはならない。仮に自分が道徳的におぞましいと思わざるを得ないことであつてもそれを支持し、少なくとも飲み込んでしまうということの意味するとしても。

これは、人格的な破滅へ行き着かざる外ない機構である。人は知的策略、口実、虚言をますます飲み込む羽目になる。そして或る一線を越えるや、恐らくは、もう何でも遣らかす準備が完了する。これが政治的テロリズム、腐敗への道である。³⁶

この機構からポパーが逃れたのは、八週間後のことであつた。一七歳の誕生日の寸前には「別の箇所では、一七歳の誕生日とある。」マルクス主義と永久の決別をしている。或る青年がデモの最中警察によつて殺されたとき（九節参照）、「この科学的証明だと自称するのは、ほんとうに当たっているとお前は知っているのか？ それをお前は本当に批判的に吟味してみたのか？ 若者たちがその生命を賭けるよう若者たちの決意を強固にするについてお前は責任を負えるのか？」とポパーは自問したのだという。「出来っこない！」これが彼の自答であつた。マルクス主義の証明をともに批判的に吟味した者は、ポパー自身を含めて、彼の周りにもいなかった。それぞれが他者の同意に寄り懸かり、誰もがお互い知的に破産していった。³⁷

二一 ポパーは更に語り続ける。すべてが階級なき社会の到来についてのマルクス主義の証明に懸かつていた。この証明は、しかし、躓く。党の指導者（層）は、党を利用して「新たな階級」の始まりとなり、マルクスの希望を裏切る。支配層となる「新しい階級」は将来の被治者を騙し彼らを疑い、それでいて、彼らには自分たちへの忠誠を求めるのである。ポパーの見方は容赦ない。

党の指導者は、勝利する以前から、そして独裁以前から既に、嫌な質問をする人物を党外追放する支配者であつた。（当時は未だそうした分子を粛清することはできなかった。）³⁸

知性ある学者でもマルクス主義から抜け出すのにどれほど困難を経験するかという一例としてサハロフ博士に言

及した後で、ポパーは、著名な生物学者ホールデン J. S. B. Haldane が共産党から足抜けするに寄与できたことを誇らしく追加している。

二二 マルクス主義の歴史観には他の特徴を備えたものもあり、「通俗（俗流）マルクス主義」と呼ばれている。ポパーが要約してくれているのでそれを訳出しよう。

社会主義のために闘う者以外の者はすべて、自分の利益のみを見てそれ以外を見ない。これを認めないとすれば、詐欺師であり偽善者である。否、彼らは大犯罪人である。何となれば、社会主義の到来を拒もうとする者どもは、革命のために払われなければならないすべての人々の犠牲につき責任を負うのだから。¹⁰⁾

二三 ポパーは、歴史解釈の第三流派、「冷笑主義」Zynismus に話題を移す。この見解、即ち冷笑主義的歴史解釈というものは、実は、マルクス主義から社会主義到来を除外してみた場合、そこに直ちに生ずる見解なのである。強いて付け加えるとするならば、いつだってそうだったし、これから先もそうだろうという悲観的な見方である。

マルクス主義も冷笑主義も、すべては誰が見ても (natürlich) 最も豊かな国、米国において最悪であり、従って、他の国々とりわけ次に豊かな国々において反米主義が生ずるのだと、教える。¹⁰⁾

二四 ポパーは、ここまで述べて来て、一八〇度転回して、彼自身の見解を述べ始める。それは、若し講演の後半部に見出しをつけるとしたら「我楽天主義者なり」としてよいであろうということである。

「私は楽天主義者である。未来については何ら知らない。従って、予言などしない。」

ポパーは、現在と未来とをキツパリと区別すべきことを説く。現在は我々が判断することが出来、またそうすべきである。未来は開いており、我々が影響を与えることが出来る。我々には、未来が過去や現在の単なる延長であるかのように見るのとは全く異なった態度で未来に向き合う道徳的義務があると、彼は言う。¹¹⁾ 開いた未来は、予見

できない道德的に様々な可能性を孕んでいる。ここからポパーは、実践的命題を導出する。

「何が到来するのであるのか？」と問うのではない。「何を我々は為すべきであるのだろうか？ほんの少しでもこの世界を善くするための行為。」しかも、後続世代が再びすべてを悪化させるかも知れないとしても、それでも我々は何かを実際よりよくすることが出来たのであるならば、そうすべきなのである。⁴²

ポパーの講演の後半は、こうして、第一に、現在に関する楽天主義、第二に、未来に関する能動主義を語ることになる。

二五 ポパーは、ヒトラーがオーストリアに侵攻して以降、『開いた社会とその敵』の執筆に取り掛かり、それは一九四五年に出版され、それなりによい反響を得たにも拘らず、戦後のマルクス主義の出鼻を挫くことができなかつた、と言う。

彼の楽観主義の要点は、彼自身の指摘に従うと、以下の通りである。⁴³

1. ポパーの楽天主義はもっぱら現在に関わっている。未来にはない。科学の世界であれ、技術のそれであれ、進歩の法則など存在しない。
2. 現在西洋で生活できる者は、最もよい社会で生活しているとポパーは主張する。たゞ道德的地獄で生活し、身体的道德的汚染に破滅の道を進んで行くよう仕向ける新しい宗教、悲観主義という宗教を広める反逆者が知識人にどれほど多かるうとも。
3. 悲観主義の宗教が始末に負えない嘘であるばかりでなく、現代社会ほど改良する余地のある社会はこれまでなかったと、ポパーは主張する。
4. こうした改良を受け入れる土壌は、新しい倫理的犠牲の準備の成果であり、そうした倫理的気風が実践され続

けてきた成果である。

二六 ポパーは、倫理的な呼び掛けとの関連で次のように述べている。¹⁴ 共産主義の力は倫理的な呼び掛けに基づいている。平和運動とそれは似たようなものである。多くのテロリストも元々は倫理的な呼び掛けに依っていたのであろう。しかし、いつの間にか「内的な偽り」innere Verlogenheitに陥ってしまったのだと。

二七 ラッセルとの関連でもポパーは面白いことを述べている。ラッセルに言わせれば、「我々は余りにも利口であるが、道徳的には余りにも愚かである。」この考えは、多くの者の賛同を得ているばかりか、冷笑主義者からもそうである。しかし、とポパーは言う、自分は正反対の考えを抱いていると。

我々は余りにも善く、また余りにも愚かである。我々は、直接間接に我々の道徳に訴えかける理論に余りにも無造作に影響されてしまふ。我々はこれら理論に十分批判的に応ずることがない。我々はそれらに対して知的に成長しきっていないのであり、それらに従順にしかも献身的に犠牲を払ってしまうのである。¹⁵

二八 ポパーは、自分の楽天主義の積極面をまとめて言う。我々は西洋世界に、これまで存在してきたうちで最善の社会システムを作り上げて、その素晴らしい世界に生きている。改良、改革を怠ってはならない。有望視された改革が実行してみるとそうでないこともある。一体承知しておくべき最も重要な認識は、我々の社会政策上の行為は目指したことや予見したこととは全く別の結果を惹起することがあるということである。それでも、我々は自らに期待した以上の成果を達成してきているのである。

二九 ポパーは、我々は道徳的に悪い世界に住んでいると囁く現在流行しているイデオロギーは、真つ赤な嘘をついていると言う。これが若者を無気力に、そして不幸にするのだ。ポパーは、私は未来について楽天主義者ではないと言う。何となれば、未来は開いている（未決である）のだから。歴史の進歩法則など存在しないし、明日のこと

は分からないのだ。善きにつけ悪しきにつけ、誰も予見できない無数の可能性が存在している。「私は三つの歴史解釈が予言者の如く目的設定することを非難する。そして私は、道徳的な理由から、我々はそれに取って代わってほならないと主張する。」まことに鮮やかで胸のすくような講演ではないか。これは、紛れもなく、極めて実存的な倫理的態度の表明に外ならない。

三〇 唯一正しい態度は、とポパーは言う、過去を未来とまったく違った仕方で診ることである、と。過去の事實は、これを歴史的並びに道徳的に判断し、何が可能であり、何が道徳的に正しいかを学ぶことができる。しかし、過去から将来の予言を引き出すとする誘惑に対してポパーは断固たる拒否の態度で臨む。ソ連邦には想像を絶するサハロフのスーパー爆弾が何千発とある。人類は明日にでも絶滅するかも知れない。しかし、大きな希望もあるのだ。現在よりも尚ほるかによい未来への可能性があるのだ、とポパーは言う。と同時に、この立場はなかなか理解してもらえないと。¹⁶

三一 ポパーは、強調して語っている。

「現在との関連における私の楽天主義が私たちに未来につき与え得るものは、希望である。」希望と激励をそれは与えてくれる。現に、我々は多くのことを改善してきているという実績があるではないか。未来に同様の成果を挙げられないという理屈はない。かくして、ポパーは、未来に関して次のように語る。

我々は予言しようなどと試みるべきではなく、只管、道徳的に正しく責任をもって行動しようとするべきである。それによって、現在を正しく認識することを学び、決して色眼鏡のイデオロギーを通して現在を見ないということが我々の義務となる。我々は現在から学ぶことができ、現実から何が達成可能であったのかを学ぶことができる。我々が現実を例の三つの歴史観イデオロギーのどれかの眼鏡を通して見ると、我々は学ぶ義務を怠ることになる。¹⁷

未来は確定などしていない。だからこそ、未来を善くすべく我々は最善を尽くす責任があるのだ。⁴⁸しかし、この責任は自由を前提にしている。自由のないところ、専制下において我々は自由でない。奴隷状態では十分な責任を負うことができない。かくして、ポパーは次の、そして最後の主要テーゼに説き及ぶ。

政治的自由——専制からの自由——は凡ゆる政治的価値のなかでも最も重要な価値である。そして我々はいつでも自由のために戦う用意がなくてはならない。何となれば、自由はいつでも失われ得るのであるから。我々は、自由は保障されているものだと思つて、拱手してはならない。⁴⁹

三二 ポパーは、サハロフ博士を引き合いに出して、専制下では誰もが人間を裏切り、自らの人間性を失い、禽獣に成り下がる危険があると主張する。

専制は我々から人間性を奪う。何となれば、我々の責任を奪うからである。

ポパーは、専制が人間的義務と人間的責任をどれほど踏みじめるものであるかを、白バラに言及して語る。二十歳そこそこの学生がピラを配つてヒトラーの戦争への抵抗を呼びかけたのであつた。彼らは自分たちにとって望みのない戦いの中へ邁進していった。戦いを引き受ける者が続くことに望みを託して。彼らは自由と責任のために、そして自らと人類のために戦つた。おぞましい非人間的な権力は彼らの口を塞いだ。我々は彼らを忘れてはならない。彼らのために語り、行動しなければならぬ、と。

政治的自由は我々の人格的責任の、人間性の前提である。少しでも世界を改善し、未来をよくしようとするすべての試みが自由という基本価値に導かれていなければならない。⁵⁰

この関連で、ポパーは仏革命とアメリカ革命とを比較して評価する。後者を高く評価してのことである。何故か？それは、個人的自由の理念をもつともよく実現し得ている限りに於いてである。専制を回避することが重視される。

もちろん、アメリカとて、一方で個人的自由の理念を掲げ、他方で奴隷制度を抱えていた。南北戦争を通して、しかも六〇万もの犠牲を払って奴隷制廃止に漕ぎつく。しかし、人種差別は存続する。自由への戦いはなお続くのである。

三三 とは言え、話はこれで終わらない。いったい識者は多くの場合、上述のように奴隷制度の廃止がまことに不十分であったと語りたがるものだが、果たして『マイヤー百科事典』もご多分に洩れず、市民戦争（即ち、南北戦争）という項目の最後に、「ところが、奴隷制は、戦争の発端であったが、見かけ上の解決を見ただけであった。」と載っている。しかし、ポパーは、一九五六年にアトランタの大学に客員としていたときに、大学生は黒人だけで、教授陣は大半が黒人で白人教授は少数派であったことを見ており、尚且つ、学長にこの素晴らしく、大きく、幸運な大学は何時、どのようにして設立されたのか尋ねたという。すると、この中心にある黒人大学は南北戦争の六年後に、ポパーの記憶によると八つの、それぞれキリスト教会によって設立された単科大学を統合して出来たのだという。そこでポパーは、会場の参加者に向かって問いかける。

私には「うわべだけの解決」という語は完全に間違っているように思われる。……著者はどのような本当の解決を提案したであろうか、と自問してみた。アトランタの大学の歴史は私に大きな感動を与えた。更に、私が一緒に経験したその他多くの努力も又⁵¹。

カール・ポパーは、その後アメリカの諸大学で、皮膚の色が何らものを言わない成功例を自ら見ているという。一九八八年ハノーファーで開催された国際会議の席上、あまりにも他の報告者がアメリカを悪様に語るので、アメリカ擁護の発言をしたところ、大変な騒動と非難の嵐が起こったという。そして、口笛のブーイングまでもが飛んだ。

以上、ポパーの答礼としての記念講演「歴史解釈における冷笑主義に抗して」を順次紹介してきた。次章では、

十年後の二〇〇一年に、即ちもうポパーはこの世にいないが、その功績を記念して、同じアイヒシュテット大学でシンポジウムが開催されたので、これを追ってみよう。

註

- (1) Karl Popper, *Logik der Forschung*, Wien 1934. Ders., *The Open Society and its Enemies*, London 1945. ポパー著、武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』世界思想社、一九七三年。
- (2) Karl Popper, *The Poverty of Historicism*, London 1945. ポパー著、久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社、昭和三十六年。尚、Popperの表記は、ポッパーとポパーの両方がある。ポッパーの表記は、田口晃『ウィーン―都市の近代』(岩波新書、二〇〇八年)にも見られるが、本稿では後者を使用する。
- (3) 碧海純一『新版法哲学概論 全訂第一版』弘文堂、一九七三年。碧海『合理主義の復権―反時代的考察―』木鐸社、一九七四年。清水幾太郎責任編集、碧海純一監訳『現代思想6 批判的合理主義』タイヤモンド社、一九七四年。
- (4) Das 8. internationale Symposium der Johannes-Messner Gesellschaft „Mensch und Naturrecht in Evolution“ vom 20. bis 22. September 2007 im Kloster St. Gabriel, Möding bei Wien, Österreich. ヨハネス・メスナー協会の設立及び同協会主催国際シンポジウム(第一回から第七回)の概要に就いては、拙稿「ヨハネス・メスナーの生涯と著作」、『社会と倫理』第一八号、(社会倫理研究所、二〇〇五年)、九六―九八頁を参照されたい。
- (5) 伝統的自然法論に就いては、拙稿「伝統的自然法論の精華―ヨハネス・メスナー晩年の著作を中心に―」、社会倫理研究所『社会と倫理』第二二号、二〇〇七年を、カトリック社会倫理学に就いては、アルトゥル・ウッツ著(拙訳)「カトリック社会理論とは何か」『社会と倫理』第一六号、(社会倫理研究所、二〇〇四年)を参照されたい。尚、伝統的自然

法論ないし伝統的自然法倫理学 (die traditionelle Naturrechtslehre bzw. -ethik) とは、「プラトン及びアリストテレスに遡り、アウグスティヌス、トマス・アクィナスにより更に発展せしめられ、十六、十七世紀のスペイン人学者、とりわけフランシスコ・ビトリア及びスアレスによって第二盛期を迎え、その後も絶えることなく伝統として継承されている思惟傾向」(Johannes Messner, *Das Naturrecht, Handbuch der Gesellschaftsethik, Staatsethik und Wirtschaftsethik*, 5. Aufl., Wien 1966, S.35, vgl. auch Johannes Messner, *Kulturrehik mit Grundlegung durch Prinzipienethik und Persönlichkeitsethik*, Tyrolia Verlag, Innsbruck-Wien-München 1954, 223-224.) を指す。又、同じ自然法論とはいつても、伝統的自然法論は、観念論的自然法論 (die idealistische Naturrechtslehre) とも唯物論的自然法論 (die materialistische Naturrechtslehre) とも異なり、(一) 人間が倫理的・法的、それ自身で確実な真理を義務拘束的な妥当要求とともに知っており、(二) 人間が自己の本性が完全な人間的存在に到るための社会秩序への要求を有することを知っている、とゆう二つの基礎を人間本性自身の中に見出すものである (J. Messner, *Das Naturrecht*, S.45ff.)。要するに、「良心の意義と事物の本性の要求」(die Bedeutung des Gewissens u. die Forderung der Natur der Sache) が伝統的自然法論にとって決定的なのである。しかしながら、我が国で自然法論といえは、決まって啓蒙期の自然法論が直ちに連想されてしまう。附言するなら、伝統的自然法論の立場を現在最も強力に推進しているのは、言うまでもなく、いわゆるカトリック社会理論であり、その中でも、神学的定位と対比されるところの、哲学的定位のそれである。従って、厳密には同一ではないが、カトリック自然法論と言い換えても大過はない。尚、メスナーと並ぶ巨匠ウツツの自然法論を中心にすえて、キリスト教社会理論、カトリック社会理論、自然法論といった基礎的概念について自覚的に論じている貴重な研究書として次を参照。Vgl. Bernd Kettern, *Sozialethik und Gemeinwohl, Die Begründung einer realistischen Sozialethik bei Arthur F. Uitz*, Berlin 1992, 24ff., 38-41, 65ff.

- (9) Eichstätter Materialien Band 14, Abteilung Philosophie und Theologie 6, *Karl R. Popper, Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte*, Hubert Kieseewetter, Karl Popper - ein Jünger von Sokrates, Verlag Friedrich Pustet Regensburg 1992.
- (10) Biographie - Auszeichnungen; Prof. Dr. Hanns W. Maul, Dekan der Geschichts- und Gesellschaftswissenschaftlichen Fakultät der Katholischen Universität Eichstätt, GRUSSWORT; Prof. Dr. Nikolaus Lobkowicz, Präsident der Katholischen Universität Eichstätt, GRUSSWORT; Prof. Dr. Hubert Kieseewetter, Katholische Universität Eichstätt, LAUDATIO „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“; Prof. Dr. Sir Karl R. Popper, Festvortrag „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“; Bibliographie.
- (8) 正式には「トニコミトニットニーントニマニマニ・カトリック大学」Katholische Universität Eichstätt-Ingolstadt である。
- (9) Nikolaus Lobkowicz, Grußwort des Präsidenten der Katholischen Universität Eichstätt, S.9.
- (10) 水波朗『自然法と洞見知—トマス主義法哲学・国法学遺稿集』（創文社、二〇〇五年）、四八三頁。
- (11) N. Lobkowicz, Grußwort des Präsidenten der Katholischen Universität Eichstätt, S.10.
- (12) 実は、聖トマスの『神学大全』全篇がそうした精神に貫かれて執筆なれている。メスナーの著作も同様である。
- (13) Hubert Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.14.
- (14) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.16 Anm.28.
- (15) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.17.
- (16) カール・ポパー著、森博訳『果てしなき探求——知的自伝』（岩波書店、一九七八年）、四六頁。

- (17) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.17.
- (18) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.18.
- (19) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.18.
- (20) この独特の意味を顧慮して、邦訳者（久野収、市井三郎）は「〈歴史主義〉」とどう表記を選択している。例えば、キーゼンワッターは、 „In seiner ersten ausgearbeiteten Kritik des Glaubens an historische Gesetzmäßigkeiten“ (S.19) 即ち、「歴史的法則性への信仰を彼が始めて詳細に批判した際」と表現している。
- (21) 『歴史主義の貧困』一三三頁。 *The Poverty of Historicism*, p.158.
- (22) 『歴史主義の貧困』一四〇頁註（9）。 *The Poverty of Historicism*, p.90, note 3.
- (23) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.20.
- (24) 『自由社会の哲学とその論敵』の訳者（武田弘道）は、 “holistic views” を「有機体観の見方」と訳出している（*The Open Society and its Enemies*, vol. II, p.212, 邦訳書「三五二頁」）。
- (25) Karl R. Popper, *Das Elend des Historizismus*, S.47f. の語句は、英語版では「ごちゃごちゃの繕い」（piecemeal tinkering）を表現している。 *The Poverty of Historicism*, p.58.
- (26) 『歴史主義の貧困』一三三頁。 *The Poverty of Historicism*, pp.89f.
- (27) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.21. 「創造的発意を駆使し、我々の勤労者と協同して、我々は人間的活動の決定的な領域で、物質的生産の領域で資本主義を凌駕するであろう。」
- (28) 『自由社会の哲学とその論敵』五頁。 *The Open Society and its Enemies*, vol. I, pp.3f.
- (29) Karl R. Popper, *Auf der Suche nach einer besseren Welt. Vorträge und Aufsätze aus dreißig Jahren*, München.

Zurich 1984, S.138.

(8) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.21.

論
(25) Karl Popper, *Die offene Gesellschaft und ihre Feinde*. Bd.1, S.170. *The Open Society*, p.121. 『自由社会の哲学』の論議』一〇七頁。

(26) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.22.

(27) H. Kieseewetter, „Karl Popper - ein Jünger von Sokrates“, S.22f. *The Open Society*, p.125. 『自由社会の哲学』の論議』一〇八頁。但し、記述は英語版の独語版にも限定句が見えない。

(28) Karl R. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.25.

(29) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.27.

(30) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.27f.

(31) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.28.

(32) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.28.

(33) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.29.

(34) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.29. 上掲の「誰が見ても」と訳出した原語は, „natürlich“である。一般的には「自然のままに」とか「当然のことだが」といった意味であるが、本文では「当然のことだが」を基礎の意味と考え、上記の如く、多少意識しておいた。詰り、記述の意味と評価の意味の双方を含んだ意味に、しかも後者に比重をかけて解釈した。しかし、正直なところ、この一語のニュアンスがよく分からない。

(35) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.29.

- (42) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.30.
- (43) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.30.
- (44) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.30f.
- (45) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.31.
- (46) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.31f.
- (47) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.32.
- (48) 「善へ」「善や」ならぬ「善」に就いては、村井実『善や』の復興』（東洋館出版社、一九九八年）が、根本的かつ明快な論述を展開している。村井博士の教育哲学に就いては、拙稿「善や」を志向する人間本性——村井実博士の自然法論的教育思想——」（『南山法学』第三二巻第一・二合併号（南山法学会、二〇〇七年）を参照。
- (49) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.32.
- (50) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.33.
- (51) K. Popper, „Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte“, S.35.

主要参考文献

- Karl R. Popper, *Logik der Forschung*, Wien 1934.
- Karl R. Popper, *The Open Society and its Enemies*, London 1945.
- Karl R. Popper, *Die offene Gesellschaft und ihre Feinde. Bd.1: Der Zauber Platons (1957) ; Bd.2: Falsche Propheten: Hegel, Marx und die Folgen (1958)*, 6. Aufl., Bern 1980.

カール・ポッパー著、武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』世界思想社、一九七三年。

Karl R. Popper, *The Poverty of Historicism*, London 1945.

Karl R. Popper, *Das Elend des Historizismus* (1965), 6. Aufl., Tübingen 1987.

カール・ポッパー著、久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社、昭和三十六年。

Karl R. Popper, *Ausgangspunkte: Meine intellektuelle Entwicklung* (1979), 4. Aufl., Hamburg 1987.

カール・ポッパー著、森博訳『果てしなき探求―知的自伝』岩波書店、一九七八年。

Eichstätter Materialien Band 14, Abteilung Philosophie und Theologie 6. Karl R. Popper, *Gegen den Zynismus in der Interpretation der Geschichte*, Hubert Kieseuwetter, Karl Popper - ein Jünger von Sokrates, Verlag Friedrich Pustet Regensburg 1992.

Hubert Kieseuwetter u. Helmut Zenz (Hrsg.), *Karl Poppers Beiträge zur Ethik*, Tübingen 2002.

Johannes Messner, *Kulturethik mit Grundlegung durch Prinzipienethik und Persönlichkeitsethik*, Wien 1954.

Johannes Messner, *Das Naturrecht. Handbuch der Gesellschaftsethik, Staatsethik und Wirtschaftsethik*, 5. Aufl., Wien 1966.

ヨハネス・メスナー著、水波朗、栗城壽夫、野尻武敏共訳『自然法』創文社、一九九五年。